

乾燥地を拓く

鳥取大学 ITP だより

6

鳥取大学では、学生が海外の現場で研究を行う機会を積極的に設けていますが、一方海外からも学生を受け入れて、研究指導を行っています。

今年2月から3月中旬の1カ月半、私の研究室に、中国の寒区旱区環境工学研

究所から、杜鶴強君がやってきました。杜君は大学院修士課程の2年生で、砂漠における砂丘の移動に関する研究を行っています。

彼の研究は、砂丘の移動を物理的に解明していくことで、例えば、砂丘の砂がどのくらい、どの方向に、どのくらいの速さで動いていくか、ということなどを突き止めています。

この研究は、どう生かされるのでしょうか？ 中国の乾燥地(ほとんどが都市から離れた内陸部にあります)では石油な

尊敬し合えるライバル

——研究は国を超えて——

どの鉱物資源が豊富であり、これを都市まで輸送するためには高速道路を使うわけですが、乾燥地では道路を造っても砂嵐によって埋もれてしまいます。これを防ぐため、砂の移動を止めたり、砂丘を固定するための技術が必要になります。彼の研究は、飛砂を防止する対策を施す際のデータとして用いられます。

研究・学問の世界では、研究者の国籍、年齢、身分や地位による優劣はありません。研究を行う上で大切なのはアイデア、つまり独創的な考えであり、議論しているうちに、こちら側も彼の発想から多くのことを学ぶこともありました。彼との交流は、あれから半年たった今も続いています。

杜君は今回の日本滞在が初めての海外



中国人学生とともに、研究について議論している様子。お互いのアイデアが、まったく新しい発想を生むこともある(左が杜君、右が著者)

経験でした。私の研究室には日本語が堪能な中国人学生がいましたが、彼の通訳を借りることもなく、われわれとの話し合いや研究発表もすべて英語で頑張りました。そして、一回りたくましくなって、中国へ帰っていきました。

彼ら留学生が、私や日本人学生との研究交流を通じて、国を超えた研究者間の橋渡し役となってくれることを願っています。また、お互い同じ研究者として、尊敬し合つと同時に良きライバルでもある、そんな関係に発展していければと思っています。

(乾燥地研究センター・准教授 木村玲二)

(月1回掲載)